

# 愛知県下の窯業遺跡出土資料に関する基礎的調査報告VI —猿投窯井ヶ谷地区・東山地区出土資料の考古学的調査—

大西 遼

(愛知県陶磁美術館 学芸員)

河野 あすか

(刈谷市歴史博物館 学芸員)

## はじめに

愛知県は、古墳時代中期に国内屈指の古窯群である猿投山西南麓古窯跡群（以下、猿投窯）が開窯して以降、連綿と窯業生産を展開してきた地域である。日本全国を見ても、愛知県のように古墳時代から現在に至るまで、連綿と生産史を追うことのできる地域はない。

県下の窯業遺跡は、各時代の生産活動の様相を現代に伝えるものであり、当地の窯業史のみならず日本陶磁史の基礎資料として極めて貴重な情報を内包している。筆者は2018年以降、窯跡出土資料を主な対象として、実測図の作成を通じた考古学的基礎的調査の報告を行ってきた（註1）。本稿では、令和4（2022）年度に実施した愛知県陶磁美術館保管資料（一部所蔵資料）の実測調査成果を踏まえ、猿投窯井ヶ谷地区及び東山地区出土資料の報告を行う。井ヶ谷地区出土資料に関しては、河野あすか氏（刈谷市歴史博物館 学芸員）と共同で行った。本稿での執筆分担は各項目末尾に記載した。（大西）

## 1. 本稿で使用する用語と編年について

猿投窯で生産されたやきものの呼称について、近年筆者は2015年に刊行された『愛知県史 別編 窯業1 古代 猿投系』にはほぼ準ずる形で、須恵器・瓷器（青瓷・白瓷）の用語を使用している（註2）。猿投窯をはじめとする東海地方の古代の窯業地において、青瓷は緑釉陶器及びそこから派生する緑釉緑彩陶器を指す。白瓷については、東海地方の古代の窯業地で生産された灰釉陶器及びそこから派生する無釉陶器（平安時代末期以降のいわゆる「山茶椀」と称されるやきものを含む）を包括した語として用いている。以上の用語に関する筆者の見解については、既に拙稿で述べているため、ここでは省略する（註3）。

ただし、本稿では猿投窯井ヶ谷地区の報告を共著執筆するため、執筆者双方の研究者としての独立性、所属機関同士の独立性の面から、3章の猿投窯井ヶ谷地区（井ヶ谷古窯群）出土資料の報告に関しては、あえて用語の統一を行わず、以下のように併記する形を取った。須恵器・灰釉陶器（白瓷）・山茶椀〔碗〕（白瓷の椀）。4章の猿投窯東山地区出土資料の報告に関しては、単著のため前稿（註4）までと同様、須恵器・白瓷の用語を用いた。また、実測図の表現については図4に示した。

なお本稿では、前稿と同様基本的に各窯の編年的位置付けについて『愛知県史 別編 窯業』の編年を参照した（註5）。当編年は、半世紀をゆうに超える猿投窯の編年研究の到達

点として、愛知県から出版されたものであり、まず参照すべきと考えている。ただし、折戸 53 号窯式については、折戸 53 号窯式 1 型式と同 2 型式という細分（註 6）を用いることとする。折戸 53 号窯式の二分の妥当性については、既に拙稿で述べたところであり、煩雑になるためにここでは繰り返さない（註 7）。

一方で、『愛知県史 別編 窯業 1 古代 猿投系』で示された編年の発表後も、特に高蔵寺 2 号窯式や折戸 10 号窯式を中心とした時期の年代観に関して、近年異論及び再検討を促す研究が発表されている（註 8）。また、10・11 世紀についても、猿投窯に限定した編年ではなく尾張・美濃を包括した編年を示し、特に 11 世紀代に半世紀ほどの間、猿投窯を含む尾張国内で操業が見られず、美濃での集中的な操業を想定する編年も提示されており、年代観について『愛知県史 別編 窯業 1 古代 猿投系』とはかなり異なる見解がある（註 9）。これらの異論・再検討を促すような研究に対して、現状筆者なりの見解を示すだけの研究を行っていない上、本稿の目的は猿投窯の編年についての分析・考察ではないため、ここでは近年の編年上の問題点として挙げるにとどめ、今後の課題としたい（註 10）。

以上、猿投窯編年には未だ問題点も指摘されているが、本稿ではひとまず先に挙げた『愛知県史 別編 窯業』の編年（折戸 53 号窯式の二分のみ追加）を基本に時期比定を行うが、実年代の問題点が指摘されていることも考慮して、基本的に実年代を示さず窯式及び型式の提示に留めることとする。（大西）

## 2. 猿投窯井ヶ谷地区（井ヶ谷古窯群）について（図 1）

刈谷市の北部、豊田市の南西部には古代から中世にかけての古窯が 76 基（註 11）存在し、井ヶ谷古窯群と呼ばれている。猿投窯の地区名では井ヶ谷地区に区分され、猿投窯全体では最も南東側に位置する。井ヶ谷古窯群（猿投窯井ヶ谷地区）の内、31 基が刈谷市の指定史跡となっている（本稿執筆時点）。井ヶ谷町の洲原池・大池・広沢池・牛池の周辺に分布し、碧海台地より古く一段高い挙母台地に広がっている。この地域は瀬戸陶土層に連なる良質な粘土を含んでいる。井ヶ谷古窯群の最も古い時期の窯は 8 世紀後半で、9 世紀前半頃に最盛期を迎え、9 世紀後半から 11 世紀にかけて衰退していったとされる。

井ヶ谷古窯群は昭和 30 年代初頭から分布調査・発掘調査・整理調査が断続的に行われ、その成果が公表されてきた（註 12）。分布調査は複数の研究者・機関によってなされたこともあり、多くが一つの窯で 2～3 程度の複数の名称が付けられている。大きくは主に字名等地名をもとに付けられた名称と、猿投窯の一地区としてとらえた上で付けられた名称がある。後者は、当初井ヶ谷古窯群が猿投窯黒笹地区に区分されていたことから「黒笹（K）-」を冠した窯名であったが（註 13）、昭和 55 年（1980）に黒笹地区から分離して猿投窯井ヶ谷地区として区分されたことにより「井ヶ谷（IG）-」を冠した窯名に変更されている（註 14）。なお、11 世紀末に無釉化して以降の白瓷（山茶椀 [碗]）を生産した窯についても、「井ヶ谷（IG）-G-」を冠した窯名が付けられた。（河野）

### 3. 猿投窯井ヶ谷地区（井ヶ谷古窯群）出土資料

本稿で報告する井ヶ谷地区（井ヶ谷古窯群）出土資料は、後述する愛知県陶磁美術館所蔵品（図5-2）を除き全て愛知県陶磁美術館保管だが、保管状況から大きく二つに分けられる。一つ目は収納付属品に記載されていた採集年月日が昭和30年代（1950年代）のもので、これらを記述の便宜上「N群資料」とする。二つ目は収納付属品に記載されていた採集年月日が昭和50年代（1970年代）のもので、これらを記述の便宜上「B群資料」とする。

以下各窯出土資料の概要を記述するが、先述の通り猿投窯井ヶ谷地区（井ヶ谷古窯群）については、複数の窯名が存在するため、便宜上「井ヶ谷（IG）-」の窯名を先頭に記述し、それ以外の窯名も列記する。また、収納付属品及び注記として書かれた窯名については、「保管窯名」として記載する。（大西）

#### （1）井ヶ谷1号窯跡（IG-1）出土資料（図1・5）

別称には黒笹101号窯跡（K-101）、松ヶ崎第3号窯跡がある。1はB群資料（保管窯名：IG-1）、2は愛知用水関連資料として現在愛知県陶磁美術館蔵となっている（保管窯名：IG-101）。なお、2には「IG-101」と注記があるが、『陶器全集 第31巻 猿投窯』の図版に掲載されている資料であり、同書の図版目録には「黒笹101号窯出土」とある（註15）。同書の刊行年は昭和55年（1980）の井ヶ谷地区設定以前であり、黒笹101号窯跡は1980年に井ヶ谷1号窯跡（IG-1）と窯名が変更されており、2を同窯出土資料として扱う。

1・2は須恵器で、1は無台椀で底部に糸切り痕がある。2は高盤で、全体が回転ナデにより仕上げられる。盤部の口縁端部は短く摘まみ上げられ、脚部は端部に向けて強く外反した後、強く屈曲して外側が縁帯状となる。折戸10号窯式～黒笹14号窯式期に比定できる。（大西・河野）

#### （2）井ヶ谷4号窯跡（IG-4）出土資料（図1・5）

別称には黒笹104号窯跡（K-104）、松ヶ崎第1号窯跡がある。B群資料（保管窯名：IG-4）。3は須恵器の蓋で、天井部にケズリが施されている。4・5は同様の窯から採集された灰釉陶器（白瓷）である。4は瓶の底部で内面に自然釉、内面、底部外面にボロが付着している。外面には黄土が塗られていると考えられる。体部下半にヘラ削りを施している。5は椀で内面全面が施釉されている。ボロが付着している。黒笹14号窯式～黒笹90号窯式に比定できる。（河野）

#### （3）井ヶ谷10号窯跡（IG-10）出土資料（図1・5）

別称には黒笹110号窯跡（K-110）、洲原第5号窯跡がある。B群資料（保管窯名：IG-10）。6は灰釉陶器（白瓷）の長頸瓶の底部、7は壺？の口縁～体部で外面全面に釉がかかり、ボロが付着している。黒笹14号窯式～黒笹90号窯式に比定できる。

（河野）

(4) 井ヶ谷 12 号窯跡 (IG-12) 出土資料 (図 1・5)

別称には黒笹 112 号窯跡 (K-112)、丸岡古窯跡がある。N群資料 (保管窯名: K-112)。8~10 は須恵器の長頸瓶の底部、11~13 は同様の窯で採集された灰釉陶器 (白瓷) である。11 は皿、12 は長頸瓶の口縁部、13 は三叉トチンである。三叉トチンは全体的に釉薬が付着している。黒笹 14 号窯式に比定できる。 (河野)

(5) 井ヶ谷 13 号窯跡 (IG-13) 出土資料 (図 1・5)

別称には黒笹 113 号窯跡 (K-113)、孫六第 4 号窯跡がある。14~16 はN群資料 (保管窯名: K-113)、17・18 はB群資料 (保管窯名 IG-13)。14 は灰釉陶器 (白瓷) の椀、15 は長頸瓶の底部で全面に釉が付着している。16 は三叉トチンである。17・18 はともに灰釉陶器 (白瓷) の皿である。17 は内面に重ね焼き痕、釉薬、ボロの付着がみられる。黒笹 14 号窯式~黒笹 90 号窯式に比定できる。 (河野)

(6) 井ヶ谷 14 号窯跡 (IG-14) 出土資料 (図 1・5)

別称には黒笹 114 号窯跡 (K-114)、洲原第 4 号窯跡がある。N群資料 (保管窯名: K-114)。19・20 は灰釉陶器 (白瓷) の椀で、19 は内面を刷毛塗し、重ね焼き痕が残る。20 も内面に釉薬が確認でき、重ね焼き痕がみられる。二つとも三日月高台である。21 は灰釉陶器 (白瓷) の瓶の底部である。内面の一部に自然釉が確認できる。黒笹 90 号窯式に比定できる。 (河野)

(7) 井ヶ谷 17 号窯跡 (IG-17) 出土資料 (図 1・6)

別称に黒笹 117 号窯跡 (K-117)、庄司第 1 号窯跡がある。保管窯名はK-117 であるが、後ろにA・B・表採とそれぞれ付されて保管されていたため、以下それぞれ分けた状態で記述する。A・Bの表記は、本窯の中でも採集位置がやや異なるためであると考えられ、近接する二つの窯が存在する可能性も考えられるが、詳細は不明である。

①N群資料 (保管窯名: K-117A)

22~29 は須恵器である。22・23 は杯蓋、24~26 は盤である。27・28 は甕で、27 は頸基部あたりに平行タタキ痕がある。28 は二重沈線により区画し、波状文が施されている。29 は陶馬の脚部で、手づくねにより成形される。剥離面から、脚部を胴部に貼り付ける際に、接着面の付近に粘土を補充して更に成形していることがわかる。また、片側側面上部には貼り付け粘土により筋肉を模したと推測される表現がある。

②N群資料 (保管窯名: K-117B)

30 は須恵器の蓋で、体部上面は3分の2ほどヘラ削りを行っている。31 は須恵器または灰釉陶器の盤である。33 は無台椀で、底部外面は糸切りを行っている。32 は須恵器の甕の底部である。34 は灰釉陶器 (白瓷) の段皿、35 は灰釉陶器 (白瓷) の長頸瓶の底部である。

③N群資料 (保管窯名: K-117 表採)

36~41、44・45 は須恵器である。36・37・39 は杯蓋、38 は有台杯、40 は盤、41 は鉄鉢

形の鉢、44・45は甕である。45は頸部に波状文が施される。42・43は灰釉陶器（白瓷）で、42は長頸瓶の底部、43は環耳付長頸瓶の環耳部である。46は棒ツクである。

以上、①～③の中で、①は須恵器のみ、②・③は須恵器を主体に灰釉陶器（白瓷）も含まれる。③は表採で、A・B（①・②）の双方に由来する資料が混在して採集されている可能性が高く、元となるA・B（①・②）には白瓷を含むか否かという組成の違いがある。これが異なる2時期の生産を示すものか、同一時期の様相差かを判断するのは、当資料のみでは難しいが、総合すると折戸10号窯式～黒笹14号窯式に比定される。

（大西・河野）

（8）井ヶ谷20号窯跡（IG-20）出土資料（図1・7）

別称に黒笹120号窯跡（K-120）、庄司第2号窯跡がある。N群資料（保管窯名：K-120）。47は須恵器の無台杯の底部で、底部外面はへら削りを施している。48は高盤の脚部である。鳴海32号窯式～折戸10号窯式に比定できる。

（河野）

（9）井ヶ谷29号窯跡（IG-29）出土資料（図1・7）

別称に黒笹69号窯跡（K-69）、西石根第11号窯跡がある。保管窯名はK-69であるが、窯名の後ろに「横」と表記されて分けて保管されているものがあり、以下「横」標記の有無で分けた状態で記述する。「横」標記の加わる資料は、本窯の横にある別の窯跡に由来する資料の可能性はあるが、詳細は不明である。

①N群資料（保管窯名：K-69）

49は須恵器の蓋である。50は須恵器の杯、51は須恵器の椀である。51は外面に大量のボロが付着しているため、調整は不明である。

②N群資料（保管窯名：K-69横）

52～55は山茶椀〔碗〕（白瓷の椀）である。52は底部外面に板目状圧痕が確認できる。

以上、①は折戸10号窯式～黒笹14号窯式に比定される須恵器、②は尾張型第5型式に比定される山茶椀〔碗〕（白瓷の椀）で構成され、明らかに時期の離れた二つの資料であることがわかる。このことは、須恵器窯と山茶椀〔碗〕窯（白瓷窯）が隣接して存在していた可能性を示唆するものと考えられる。

（河野）

（10）井ヶ谷30号窯跡（IG-30）出土資料（図1・7）

別称に黒笹99号窯跡（K-99）、石根古窯跡（石根第1号窯跡）がある。N群資料（保管窯名：K-99）。56は須恵器の甕である。鳴海32号窯式～黒笹14号窯式に比定できる。

（大西）

（11）井ヶ谷47号窯跡（IG-47）出土資料（図1・7）

別称に黒笹147号窯跡（K-147）、石根第2号窯跡がある。N群資料（保管窯名：K-147）。57～59は須恵器で、57は杯蓋、58は無台椀、59は甕である。折戸10号窯式～黒笹14号窯式に比定できる。

（大西）

(12) 草野池窯跡出土資料 (図1・8)

N群資料 (保管窯名: 草野池窯)。現在草野池周辺に窯跡はないため、どこで採集されたものなのか不明である。

60~62は須恵器である。60・61は無台杯で、底部はへら削りが確認できる。60はゆがみが大きい。62は長頸瓶である。63~65は灰釉陶器 (白瓷) の長頸瓶で、63は頸部から肩部、64・65は体部下半~底部である。63の頸部と肩部の接合は二段構成である。64は内部に大量のボロが付着している。黒笹14号窯式に比定できる。 (大西・河野)

(13) 井ヶ谷G-5号窯跡 (IG-G-5) 出土資料 (図1・8)

別称に西石根第6号窯跡がある。B群資料 (保管窯名: IG-G-5)。66は山茶椀 [碗] (白瓷の椀)、67は輪花椀、68・69は小皿である。66・67の高台には靱殻痕が認められる。尾張型第5型式に比定される。 (大西)

(14) 井ヶ谷G-7号窯跡 (IG-G-7) 出土資料 (図1・8)

別称に西石根第9号窯跡がある。B群資料 (保管窯名: IG-G-7)。70は山茶椀 [碗] (白瓷の椀) で、高台には靱殻痕が認められる。尾張型第5型式に比定される。

(大西)

#### 4. 猿投窯東山地区出土資料

ここで報告する資料は全て愛知県陶磁美術館保管の資料であるが、保管状況から大きく二つに分けられる。一つは前述の猿投窯井ヶ谷地区 (井ヶ谷古窯群) 出土資料で「N群資料」としたものと同種のものである。二つ目は先の「N群資料」「B群資料」とも保管状況が異なるもので、これを記述の便宜上「S群資料」とする。

(1) 東山35号窯跡 (H-35) 出土資料 (図2・9)

本窯出土資料については既に調査報告がなされているが (註16)、改めて調査を行った。保管窯名はH-35であるが、後ろに灰層表採、下層灰層、上層灰層とそれぞれ付されて保管されていたため、以下それぞれ分けた状態で記述する。

①N群資料 (保管窯名: H-35 灰層表採)

既に一部の資料については拙稿で報告を行っているが (再1~8) (註17)、補足資料を報告する。71は白瓷の灰釉椀である。灰釉は口縁部内外面に浸け掛けで施される。見込みに6つの直線・折線が交差した線刻が施されている。

②N群資料 (保管窯名H-35 下層灰層)

72・73は白瓷である。72は灰釉椀で、口縁部外面は釉層が剥がれ確認できないが、内面を見ると灰釉が浸け掛けで施されたことが確認できる。73は灰釉深椀の高台である。

③N群資料 (保管窯名H-35 上層灰層)

74は白瓷の灰釉輪花椀で、口縁端部に控えめな輪花表現があり、口縁部内外面には灰釉

が浸け掛けで施される。

以上①～③については、上層と下層灰層の資料が小片のみということで、作業幅を示すような型式差は現状見出しがたい。いずれも折戸 53 号窯式 2 型式～東山 72 号窯式の間で収まるものと考えられるが、71 の灰釉椀に関しては、高台の形態や底部から腰部にかけて回転ヘラ削りが施されている点を見ると、他の個体よりも古式の要素を持つ。71 単体では折戸 53 号窯式 1 型式の特徴に最も近いものと考えられるが、客体的な資料であるため積極的な評価は保留したい。

### (2) 東山 42 号窯跡 (H-42) 出土資料 (図 2・9)

本窯出土資料については既に調査報告がなされているが (註 18)、改めて調査を行った。N群資料 (保管窯名 : H-42)。75～77 は白瓷で、75 は灰釉椀、76 は灰釉皿、77 は灰釉椀ないし皿の底部である。75・76 は口縁部のみの小片であり、灰釉の施釉範囲や方法は定かでない。折戸 53 号窯式 2 型式に比定できる。

### (3) 東山 112 号窯跡 (H-112) 出土資料 (図 2・10)

本窯出土資料については既に調査報告がなされているが (註 19)、改めて調査を行った。S群資料 (保管窯名 : H-112 灰層)。82～96 は白瓷で、82～87 は灰釉椀、88 は灰釉深椀、89 は灰釉輪花椀、90～93 は灰釉皿、94・95 は灰釉広口瓶、96 は灰釉広口瓶ないし灰釉短頸壺である。総じて灰釉は浸け掛けにより施されているが、95 は灰釉が刷毛塗りにより施されているものと考えられる。95 のような奈良時代から続く高台付の瓶・壺底部が存在する一方で、96 のように平安時代後期～末期に主流を占めるようになる平底の瓶・壺底部が出現している。折戸 53 号窯式 1 型式～同 2 型式に比定できる。

なお、本窯の窯名や遺跡の位置について、いくつかの問題があるためここで補足しておく。本窯の記載の初現は 1987 年の齊藤孝正による報告 (註 20) と考えられ、1981 年刊行の『愛知県猿投山西南麓古窯跡群分布調査報告 (Ⅱ)』の窯跡分布図には本窯の記載が無く (註 21)、これ以降に発見された窯と思われる。2015 年刊行の『愛知県史 別編 窯業 1 古代 猿投系』には東山 112 号窯跡 (H-112 号窯跡) についての記載があるが、窯跡分布図では図 2 の H-112 (\* 1) のところに点が確認でき、窯跡一覧表では主な出土遺物に須恵器と書かれている (註 22)。本窯の出土資料には須恵器が確認できないことに加え、齊藤による報告で示された窯跡の位置は図 2 の H-112 (\* 2) である。すなわち、齊藤の報告にある白瓷窯の東山 112 号窯跡と『愛知県史 別編 窯業 1 古代 猿投系』に記載されている須恵器窯の東山 112 号窯跡は、同一の窯名ながら全く別の窯跡を指している。また、齊藤の報告で示された東山 112 号窯跡の位置について、『愛知県猿投山西南麓古窯跡群分布調査報告 (Ⅱ)』及び『愛知県史 別編 窯業 1 古代 猿投系』の窯跡分布図を参照すると、窯跡の点が落とされていない。比較的近い地点に東山 66 号窯跡 (H-66) の点があるが、両書とも本窯は高蔵寺 2 号窯式の須恵器窯として記載されており、やはり本稿で扱っ

た東山 112 号窯跡とは別の窯跡であろう。おそらく、『愛知県猿投山西南麓古窯跡群分布調査報告（Ⅱ）』の時点で猿投窯東山地区の分布調査の成果が一区切りを得て以降、新たな分布図である『愛知県史 別編 窯業 1 古代 猿投系』の刊行まで約 30 年以上の間が空いていることから、その間に齊藤報告及び本稿で対象とした白瓷窯の東山 112 号窯跡の存在が抜け落ちてしまった可能性がある。改めて本窯の所在地の現状調査を行う他、重複している窯跡名の問題を整理・修正していく必要があり、今後の課題としておきたい。

（４）東山G-22 号窯跡（H-G-22）出土資料（図 3・9）

N群資料（保管窯名：H-22（Ⅱス））。既に一部の資料については拙稿で報告を行っているが（再 9～11）（註 23）、補足資料を報告する。78～80 は無釉の白瓷で、78・79 は椀、80 は小椀である。79 は高台に靱殻痕が認められる他、見込みの重ね焼き部分にも靱殻痕が認められる。初期山茶椀第 3 型式～同 4 型式に比定できる。

（５）東山G-30 号窯跡（H-G-30）出土資料（図 3・9）

N群資料（保管窯名：H-30（G））。81 は無釉の白瓷の椀である。高台の断面形は、自重で潰れていない、なるべく製作時の状況を良く残す箇所で作成したが、大部分の箇所が潰れて断面台形になっている。尾張型第 6 型式に比定できる。

（６）東山G-72 号窯跡（H-G-72）出土資料（図 3・10）

N群資料（保管窯名：H-72（G））。97・98 は無釉の白瓷である。97 は注口器形の注口部で、心棒をもとに粘土を貼りつけて成形した後、心棒が引き抜かれたものと考えられる。外面は縦方向のヘラ削りで仕上げられている。98 は焼き上がりや色調等が 97 と類似した個体だが、明確な接合箇所や 97 の注口に継続するような屈曲等は残存部から確認できず、現状では同一個体と判断することができない。他に椀・小椀・小皿等時期を特定しやすい資料が無いが、焼き上がりや器面の仕上げの雰囲気から判断して 12 世紀頃の所産と考えたい。

（７）東山G-43 号窯跡（H-G-43）出土資料（図 3・10）

N群資料（保管窯名：H-43）。保管窯名は「G」の付されていないH番号のみのため、東山 43 号窯跡（H-43）出土資料の可能性も考えられたが、東山 43 号窯跡は岩崎 101 号窯式の須恵器窯とされており（註 24）、今回報告する資料内容とは明らかに異なる。「G」を窯名に含む東山G-43 号窯跡については、初期山茶碗第 3 型式の白瓷窯であることが知られており（註 25）、今回報告する資料内容と合致するため、東山G-43 号窯跡出土資料として扱う。99・100 は無釉の白瓷であるが、いずれも焼成は良好で、99 は褐灰白色から灰白色、100 は褐灰白色を呈し、緋色が出ている。99 は片口鉢と考えられるもので、口縁部は強いナデにより外反し、端部は厚みを減じつつ丸く収める。100 は甕ないし壺で、胴部から肩部にかけては緩い回転ナデにより仕上げられ、口頸部は回転ナデにより仕上げられる。口縁

部は外反し、口縁端部は外面を面取りして収める。他に椀・小椀・小皿等時期を特定しやすい資料が無いが、猿投窯の片口鉢の編年を行った青木修の研究を参照すると（註26）、99の片口鉢と考えられる個体は初期山茶碗第3型式の時期に比定できる。また、100のような壺ないし甕については、平安時代末期の猿投窯では生産が限られ、猿投窯における平安時代末期の貯蔵器種の生産を伝える好例である。（大西）

## おわりに

以上、猿投窯井ヶ谷地区（井ヶ谷古窯群）及び猿投窯東山地区出土資料について調査報告を行った。基礎的な報告と時期比定にとどまる記述となったが、今後他窯の資料を交え、分析・検討を行う機会を持ちたい。

井ヶ谷地区（井ヶ谷古窯群）については、猿投窯の他地区よりも遅れて開窯し、猿投窯でも最も南東部で操業が行われた。地理的にも猿投窯の大部分が尾張国に属する中で、完全に三河国側に存在する等、特異な存在である。近年、刈谷市歴史博物館による最新の分布調査、発掘調査が行われている。近くこれらの成果の公開がなされる（註27）。そうした成果と組み合わせて分析・検討することで、本稿で報告した資料の井ヶ谷地区（井ヶ谷古窯群）内での位置づけをより深めていくことが課題である。

東山地区については、戦後他地区よりも早い段階で土地開発が進んだことから、本格的な発掘調査がなされないまま破壊された窯が多く、本稿で報告した資料は当地区の分析・検討を行う際に重要な資料となる。東山地区は、猿投窯で瓷器生産が極めて盛んだった9世紀代にはわずかな窯数しかないが、猿投窯全体で生産が急激に縮小する10世紀においてむしろ窯数を拡大させ、白瓷が無釉化して以降の11世紀末から12世紀にかけて再び中心的な地位を占めるとされる（註28）。本稿で報告した資料群も10世紀・12世紀を中心とする資料であり、当該期の猿投窯を研究する上で重要である。

今後も引き続き、猿投窯をはじめとする愛知県下の須恵器・瓷器窯出土資料の基礎的調査を継続していく予定である。（大西・河野）

## [註]

(1) 大西遼 2018「愛知県下の窯業遺跡出土資料に関する基礎的調査報告Ⅰ—猿投窯東山地区及び尾北窯篠岡地区出土須恵器・瓷器の考古学的調査—」『愛知県陶磁美術館 研究紀要』23 愛知県陶磁美術館。

大西遼 2019「愛知県下の窯業遺跡出土資料に関する基礎的調査報告Ⅱ—猿投窯東山地区及び尾北窯出土須恵器・瓷器の考古学的調査—」『愛知県陶磁美術館 研究紀要』24 愛知県陶磁美術館。

大西遼 2020「愛知県下の窯業遺跡出土資料に関する基礎的調査報告Ⅲ—猿投窯東山地区出土瓷器の考古学的調査—」『愛知県陶磁美術館 研究紀要』25 愛知県陶磁美術館。

大西遼 2021「愛知県下の窯業遺跡出土資料に関する基礎的調査報告Ⅳ—猿投窯黒笹・東

山地区出土須恵器・瓷器の考古学的調査』『愛知県陶磁美術館研究紀要』26 愛知県陶磁美術館。

大西遼 2022「愛知県下の窯業遺跡出土資料に関する基礎的調査報告Ⅴ—猿投窯黒笹 91 号窯跡、中世猿投窯出土重要陶片の考古学的調査—」『愛知県陶磁美術館研究紀要』27 愛知県陶磁美術館。

(2) 前掲註(1) 大西遼 2019~2022。

(3) 前掲註(1) 大西遼 2020。

大西遼 2020a「地方における白瓷生産拡散の実態と猿投窯—尾張国知多半島・伊勢国・飛騨国・近江国・山城国の白瓷窯から—」『東海窯業史研究論集』Ⅲ 東海窯業史研究会。

大西遼 2021a「中世初期の東海地方における子持器台」『中近世陶磁器の考古学』第十三巻 雄山閣。

(4) 前掲註(1) 大西遼 2019~2022。

(5) 城ヶ谷和広 2015「第5節 編年論 須恵器」『愛知県史』別編 窯業1 古代 猿投系 愛知県。

井上喜久男 2015「第5節 編年論 瓷器」『愛知県史』別編 窯業1 古代 猿投系 愛知県。

藤澤良祐 2007「第1章 総論」『愛知県史』別編 窯業2 中世・近世 瀬戸系 愛知県。

(6) 齊藤孝正 1989「灰釉陶器生産の一様相」『美濃の古陶』第3号 美濃古窯研究会。

齊藤孝正 2000「附論 猿投窯出土の灰釉・緑釉陶器椀・皿類の変遷」『日本の美術 第409号 越州窯青磁と緑釉・灰釉陶器』至文堂。

(7) 前掲註(3) 大西遼 2020a。

(8) 尾野善裕 2022「猿投窯系須恵器編年の再編と下り松瓦窯の操業年代—須恵器から見た西三河の鋸歯文縁複弁六葉蓮華文軒丸瓦—」『伊保廃寺発掘調査報告書』名古屋大学大学院人文学研究科考古学研究室。

古尾谷知浩 2022「愛知県春日井市高蔵寺二号窯出土篋書須恵器の年代について」『伊保廃寺発掘調査報告書』名古屋大学大学院人文学研究科考古学研究室。

(9) 尾野善裕 2008「古代の灰釉陶器生産と来姓古窯跡群」『来姓古窯跡群』豊田市教育委員会 等。

(10) 近年の編年上の問題点として指摘された高蔵寺2号窯式や折戸10号窯式の時期の評価(前掲註(8))について、詳細を述べることはしないが一部疑問点もある。高蔵寺2号窯跡の操業時期、及び高蔵寺2号窯式の時期の一端を7世紀末とすることについては、指摘のある通り都城での出土事例や「□本五十戸」「岡本里」の篋書き陶片の評価により首肯すべきものと考えられる。しかし、高蔵寺2号窯式の終末年代がどこまで下るのかについては、高蔵寺2号窯式期の他の窯や地元尾張・三河での消費地遺跡の分析も踏まえて検討すべき余地はあると思われる。また、折戸10号窯式の時期的な評価に関しては、特に標式窯の折戸10号窯跡出土品について、周辺からの資料混入の有無についても再検討する必要

性や、熱残留磁気測定による年代観との照合・検討も必要かと考える。折戸 10 号窯式及び該当する時期の窯資料に関して、複数器種にわたっての形態差の有無等についても、改めて比較検討を行う必要があるだろう。

また、10・11 世紀の編年に関する尾野善裕の見解（前掲註（9））に関しても、仮に 11 世紀代の約半世紀ほど尾張国にはほぼ窯が無い時期を想定した場合、それまで猿投窯産製品が供給の主体を占めていたと考えられる尾張・西三河地域の消費地遺跡において、当該期の大規模産地である美濃窯産（東濃窯産）の製品が目立って流通している可能性が高いが、実際の消費地遺跡出土資料が実態に即すのか分析・検討を行う必要があるだろう。もちろん、当該期の平安京では圧倒的多数が美濃窯産で占められることは疑いないが、尾張・西三河地域において状況が一致するかは確認する必要がある。なぜなら、平安京等への広域流通を担った当該期の美濃窯で、形態等の新しい要素がより早く出現、推移する等、様式変化を先導する動きが存在する可能性がある一方、小規模な在来窯となった猿投窯では古い要素が残存していった可能性もあると考えるからである。7 世紀の須恵器の蓋杯の器形転換が、たびたび中央と地方では時期差があることが指摘される等、古代においては上記のような可能性は予測しておくべきだろう。すなわち、10・11 世紀は、猿投窯・美濃窯で異なる形態変化を遂げている可能性を現状では否定するだけの検討はなされておらず、尾張・西三河地域の消費地における分析は今後不可欠であろう。

いずれにせよ、ここで取り上げた編年に関する諸研究は重要な指摘を多く含むことになり、猿投窯編年には今なお取り組むべき問題が残されている。先に述べたいいくつかの分析・検討については、今後の課題としたい。

(11) 『刈谷市史』第 5 巻（刈谷市史編さん編集委員会 1989）によると、「井ヶ谷地区には 77 基の古窯跡が知られている」とあるが、表中の窯数が 76 基であること、愛知県教育委員会刊行の『愛知県猿投山西南麓古窯跡群分布調査報告（Ⅰ）』（檜崎彰一・齊藤孝正 1980）に掲載されている I G 番号の窯も 76 基であることから、刈谷市史編纂時に数え間違えている可能性が高い。そのため本稿では 76 基とする。

(12) 主なものを以下に列記する。

- 檜崎彰一 1957 『愛知県猿投山西南麓古窯址群』愛知県教育委員会
- 檜崎彰一ほか 1958 『愛知県猿投山西南麓古窯址群』愛知県教育委員会
- 久永春男ほか 1958 『刈谷市の古窯』刈谷市誌編纂委員会
- 刈谷高校郷土研究クラブ 1958 『ふるさと』刈谷の遺跡
- 加藤岩蔵ほか 1967 『昭和 42 年度井ヶ谷古窯址群調査概報』愛知教育大学
- 加藤岩蔵・斎藤嘉彦ほか 1970 『井ヶ谷古窯址群—愛知教育大学用地関係古窯調査報告書一』愛知教育大学
- 愛知県教育委員会 1972 『愛知県遺跡分布図』愛知県教育委員会
- 文化庁文化財保護部 1975 『全国遺跡地図 23 愛知県』文化庁
- 檜崎彰一・齊藤孝正 1980 『愛知県猿投山西南麓古窯跡群分布調査報告』（Ⅰ）愛知県教育

## 委員会

加藤岩蔵・斎藤嘉彦ほか 1989『増補井ヶ谷古窯址群—愛知教育大学所蔵考古資料調査報告—』愛知教育大学

浅田員由 1989「窯業の展開」『刈谷市史』第1巻 本文（原始・古代・中世）刈谷市

浅田員由 1989「第6章 井ヶ谷古窯跡群」『刈谷市史』第5巻 資料 自然・考古 刈谷市

杉浦知 1997『刈谷の考古資料図録—谷沢靖氏寄贈資料Ⅱ—』刈谷市教育委員会

愛知県史編さん委員会 2015『愛知県史』別編 窯業1 古代 猿投系 愛知県

大西遼・尾崎綾亮・片桐妃奈子・河野あすか・中川永・森まどか 2018「灰釉陶器出現前後の猿投窯—1. IG-78号窯—」『三河考古』第28号 三河考古刊行会

河野あすか 2021「西石根第7号窯（IG-67）の須恵器、灰釉陶器—刈谷市所蔵の谷沢資料から—」『刈谷市歴史博物館研究紀要』第1号 刈谷市歴史博物館

(13) 前掲註 (12) 檜崎彰一 1957 以降。

(14) 前掲註 (12) 檜崎彰一・齊藤孝正 1980。

(15) 檜崎彰一 1966『陶器全集』第31巻 猿投窯 平凡社。

(16) 齊藤孝正 1987「猿投窯東山地区における灰釉陶器の様相—東山72号窯出土遺物を中心として—」『名古屋大学総合研究資料館報告』第3号 名古屋大学総合研究資料館。

(17) 前掲註 (1) 大西遼 2020。

(18) 前掲註 (16)。

(19) 前掲註 (16)。

(20) 前掲註 (16)。

(21) 檜崎彰一・齊藤孝正『愛知県猿投山西南麓古窯跡群分布調査報告』（Ⅱ） 愛知県教育委員会。

(22) 愛知県史編さん室 2015『愛知県史』別編 窯業1 古代 猿投系 愛知県。

(23) 前掲註 (1) 大西遼 2021。

(24) 前掲註 (22)

(25) 愛知県史編さん室 2007『愛知県史』別編 窯業2 中世・近世 瀬戸系 愛知県。

(26) 青木修 2002「猿投窯の片口鉢について—片口鉢生産と編年に関する覚書—」『愛知県史研究』第6号 愛知県。

(27) 河野あすか 2023『井ヶ谷古窯跡群分布調査報告書』刈谷市（近刊）。

井ヶ谷地区（井ヶ谷古窯群）は本稿でも述べた通り複数の名称を持つ窯が大部分を占めるが、既存の各調査及び複数の窯名の対照や現況についても報告がなされるであろう。

(28) 前掲註 (16) 齊藤孝正 1987 等。



図1 本稿で扱う猿投窯井ヶ谷地区（井ヶ谷古窯群）の窯跡（註27を改変）

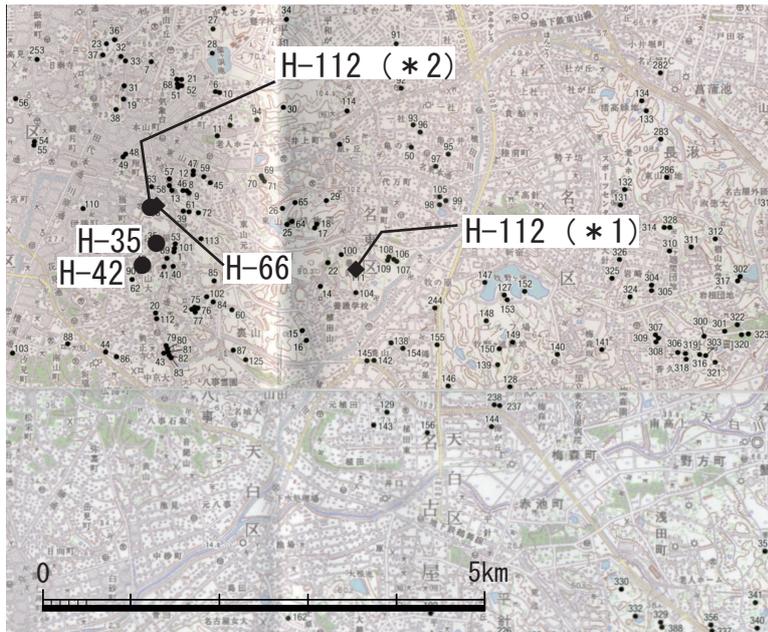


図2 本稿で扱う平安時代後期までの猿投窯東山地区の窯跡  
 (愛知県史編さん室 2015 『愛知県史』別編 窯業1 古代 猿投系 愛知県の分布図を改変追記)  
 \*1: 註(22) 文献  
 \*2: 註(16) 文献

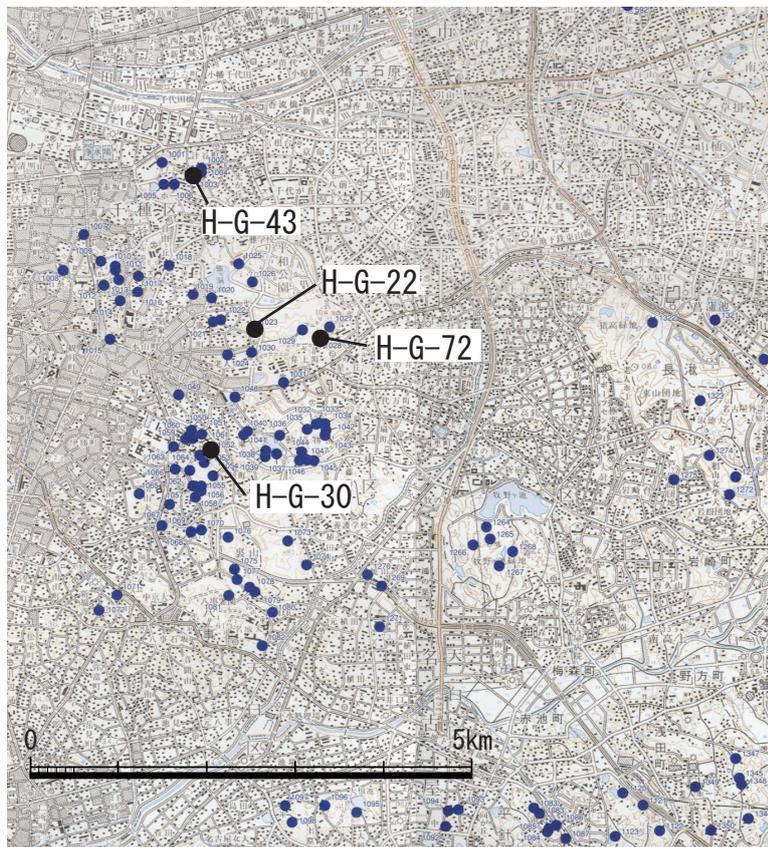


図3 本稿で扱う平安時代末期以降の猿投窯東山地区の窯跡  
 (愛知県史編さん室 2007 『愛知県史』別編 窯業2 中世・近世 瀬戸系 愛知県 を改変追記)

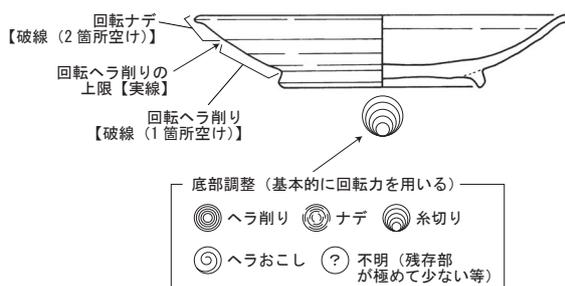
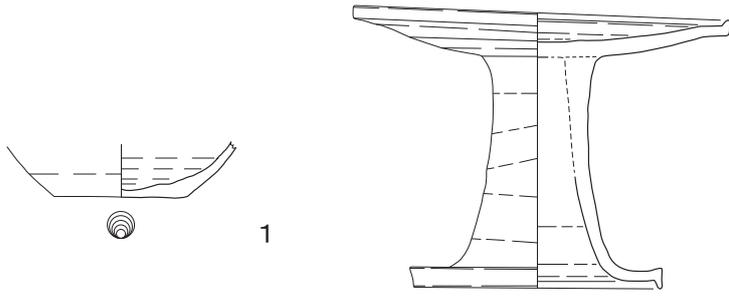
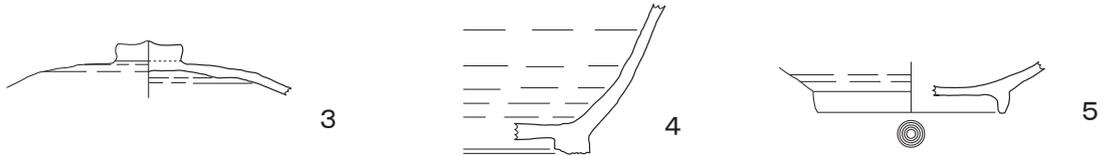


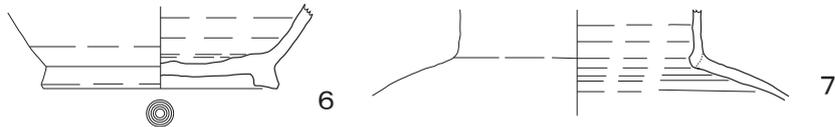
図4 本稿の実測図の表現 ((註1) 大西遼 2021)



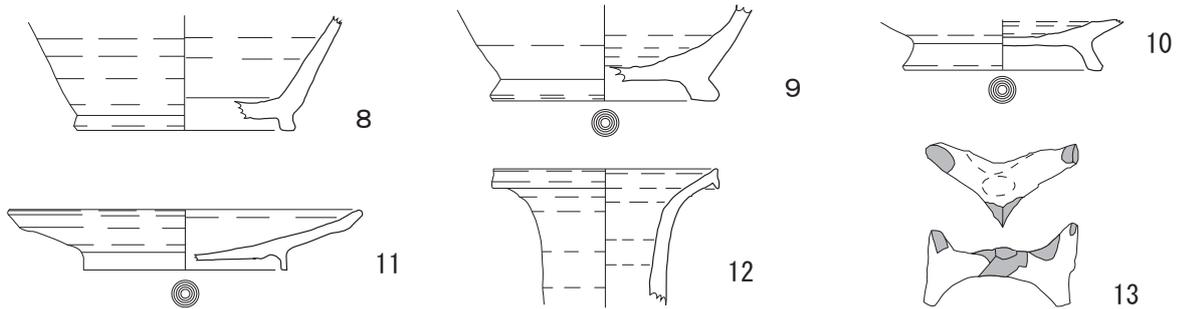
井ヶ谷 1号窯跡 (IG-1) [別称: 黒笹 101号窯跡 (K-101)、松ヶ崎第3号窯跡]



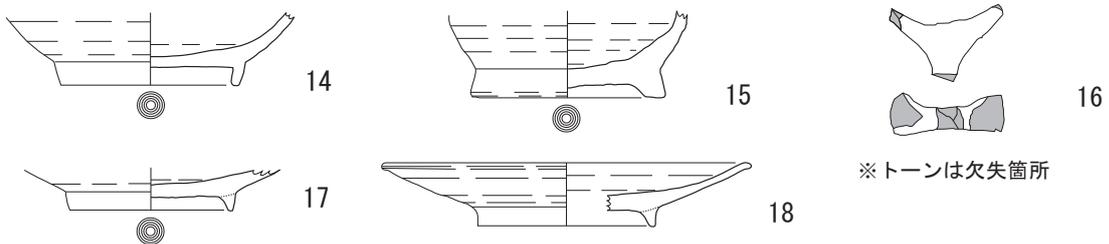
井ヶ谷 4号窯跡 (IG-4) [別称: 黒笹 104号窯跡 (K-104)、松ヶ崎第1号窯跡]



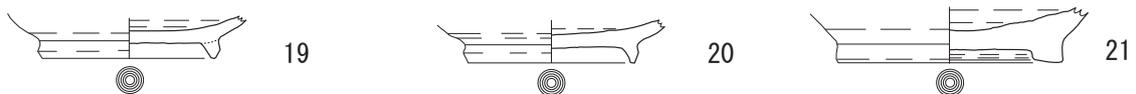
井ヶ谷 10号窯跡 (IG-10) [別称: 黒笹 110号窯跡 (K-110)、洲原第5号窯跡]



井ヶ谷 12号窯跡 (IG-12) [別称: 黒笹 112号窯跡 (K-112)、丸岡古窯跡] ※トーンは欠失箇所



井ヶ谷 13号窯跡 (IG-13) [別称: 黒笹 113号窯跡 (K-113)、孫六第4号窯跡]



井ヶ谷 14号窯跡 (IG-14) [別称: 黒笹 114号窯跡 (K-114)、洲原第4号窯跡]

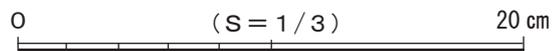
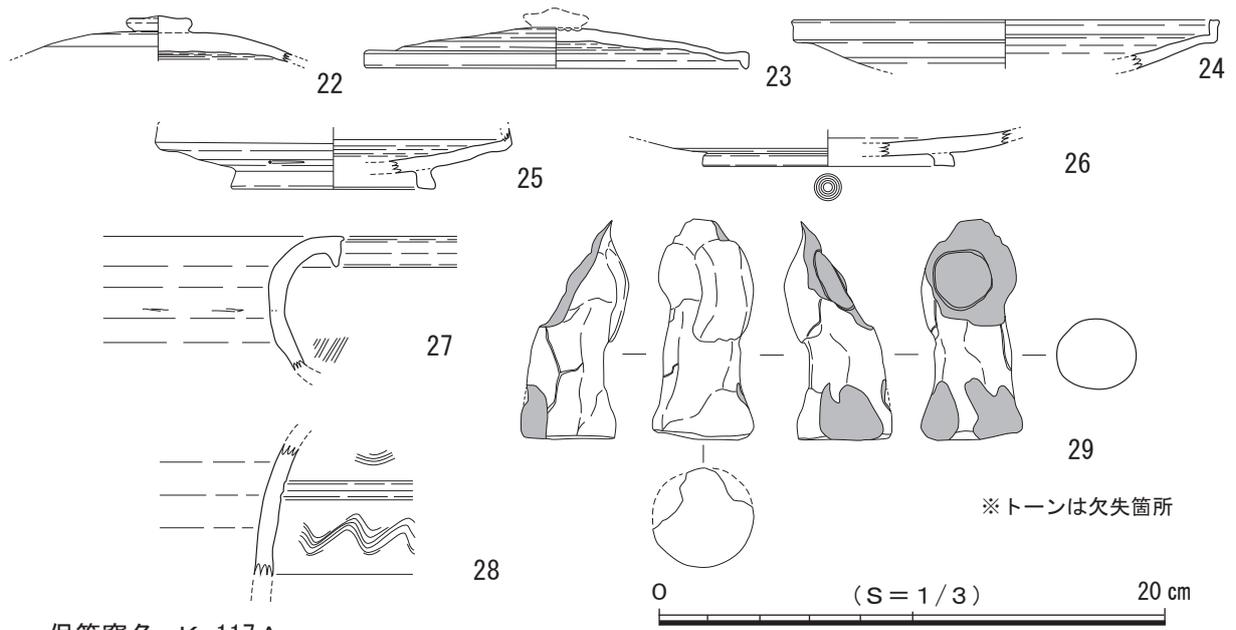
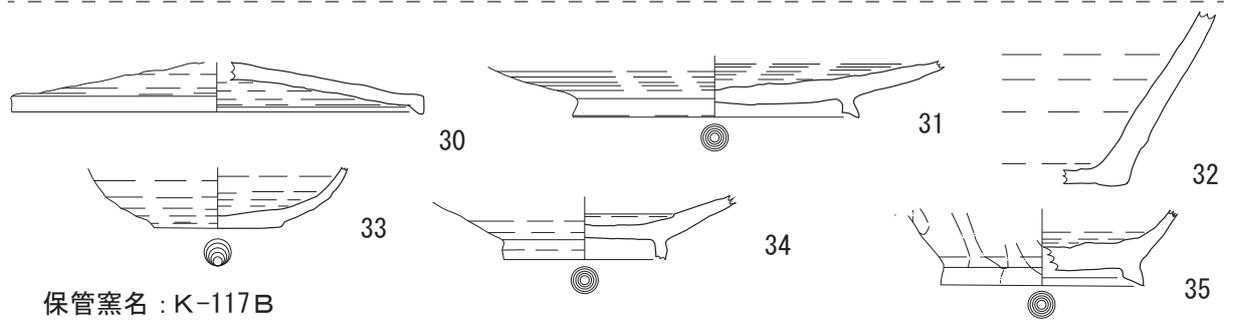


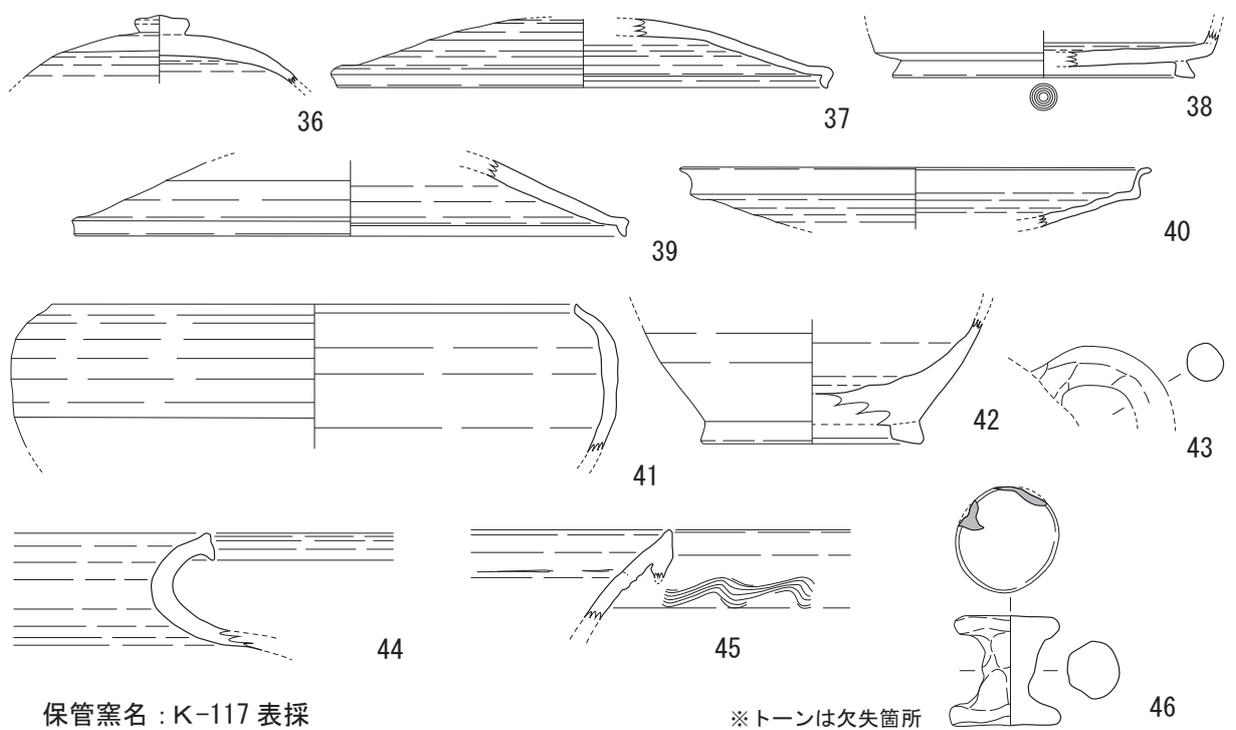
図5 猿投窯井ヶ谷地区 (井ヶ谷古窯群) 出土資料①



保管窯名 : K-117A



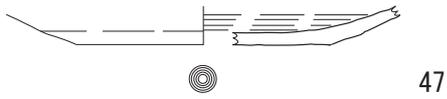
保管窯名 : K-117B



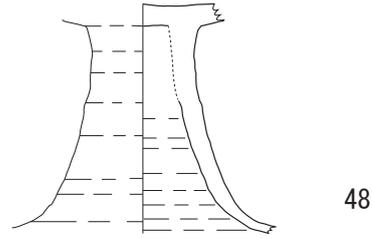
保管窯名 : K-117 表採

図6 猿投窯井ヶ谷地区(井ヶ谷古窯群)出土資料②

井ヶ谷 17号窯跡 (IG-17) [別称: 黒笹 117号窯跡 (K-117)、庄司第1号窯跡]



47



48

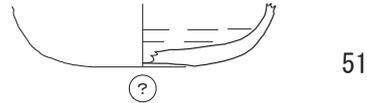
井ヶ谷 20号窯跡 (IG-20) [別称: 黒笹 120号窯跡 (K-120)、庄司第2号窯跡]



49

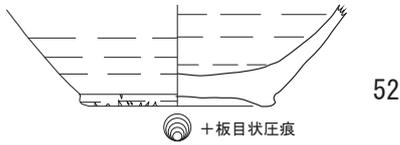


50



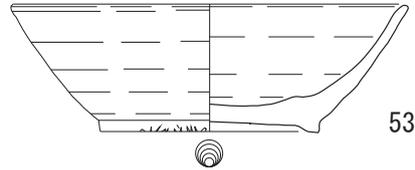
51

井ヶ谷 29号窯跡 (IG-29) [別称: 黒笹 69号窯跡 (K-69)、西石根第11号窯跡]

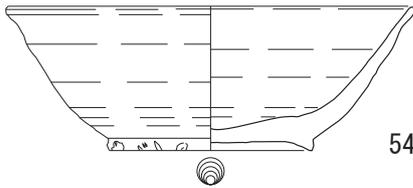


52

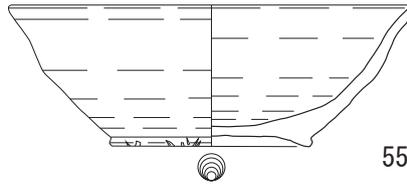
+板目状压痕



53

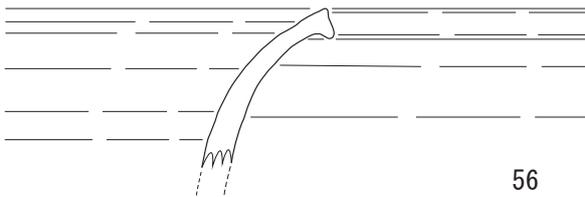


54



55

井ヶ谷 29号窯跡横 (IG-29横) [別称: 黒笹 69号窯跡横 (K-69横)、西石根第11号窯跡横]

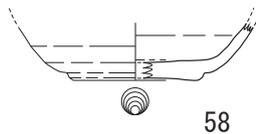


56

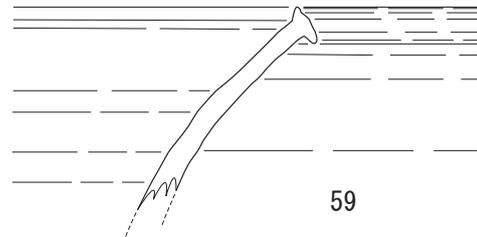
井ヶ谷 30号窯跡 (IG-30) [別称: 黒笹 99号窯跡 (K-99)、石根古窯跡 (石根第1号窯跡)]



57



58



59

井ヶ谷 47号窯跡 (IG-47) [別称: 黒笹 147号窯跡 (K-147)、石根第2号窯跡]

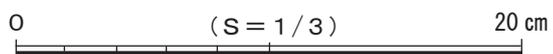
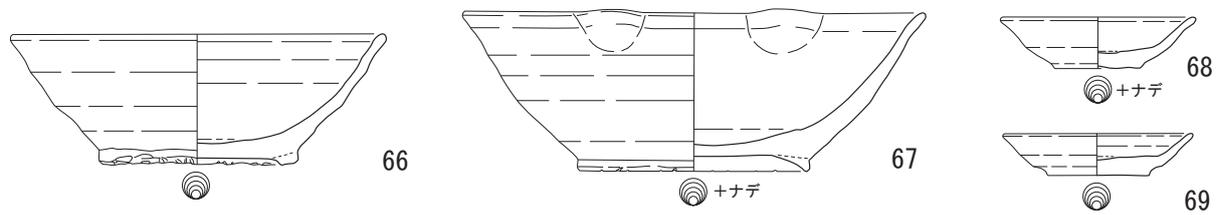
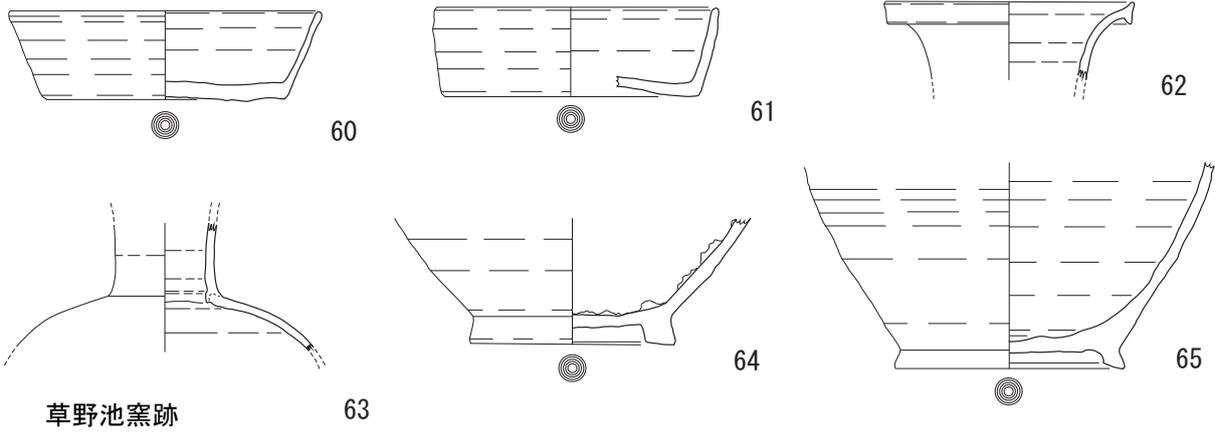
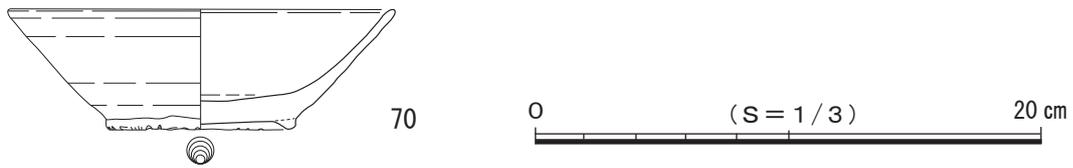


图7 猿投窯井ヶ谷地区 (井ヶ谷古窯群) 出土資料③

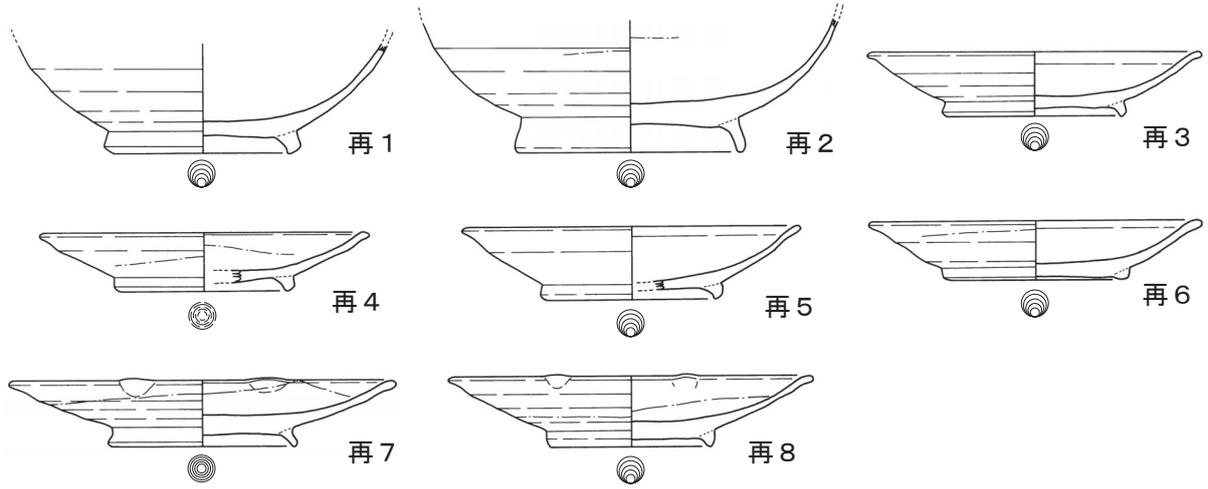
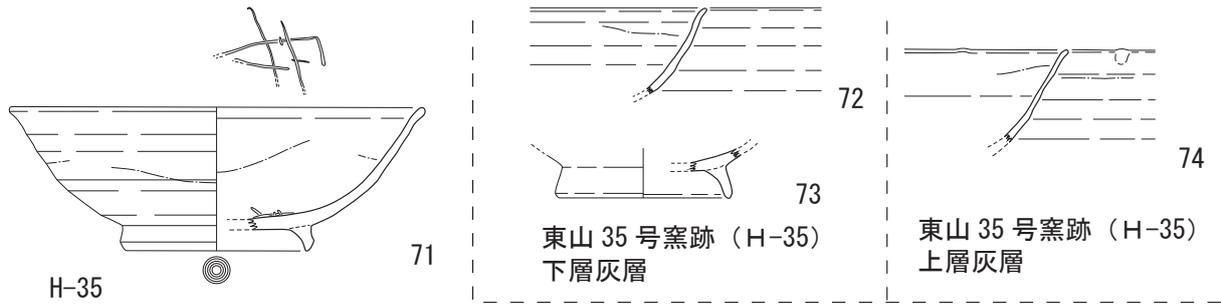


井ヶ谷G-5号窯跡（IG-G-5）[別称：西石根第6号窯跡]

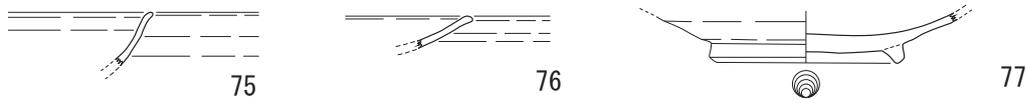


井ヶ谷G-7号窯跡（IG-G-7）[別称：西石根第9号窯跡]

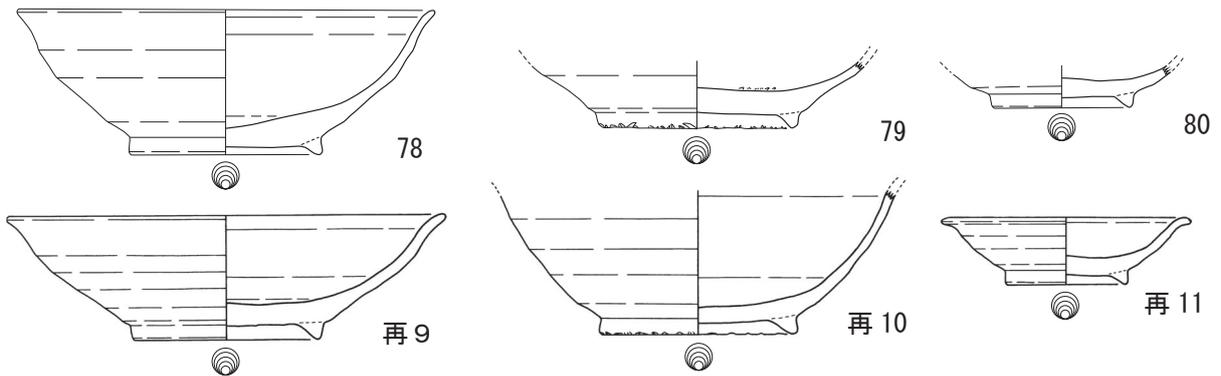
図8 猿投窯井ヶ谷地区（井ヶ谷古窯群）出土資料④



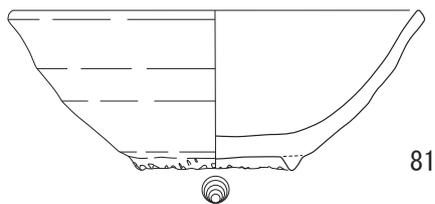
東山 35 号窯跡 (H-35) (再 1 ~ 8 : 註 (1) 大西遼 2020 の再掲載)



東山 42 号窯跡 (H-42)



東山 G-22 号窯跡 (H-G-22) (再 9 ~ 11 : 註 (1) 大西遼 2021 の再掲載)



東山 G-30 号窯跡 (H-G-30)

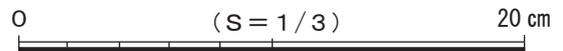
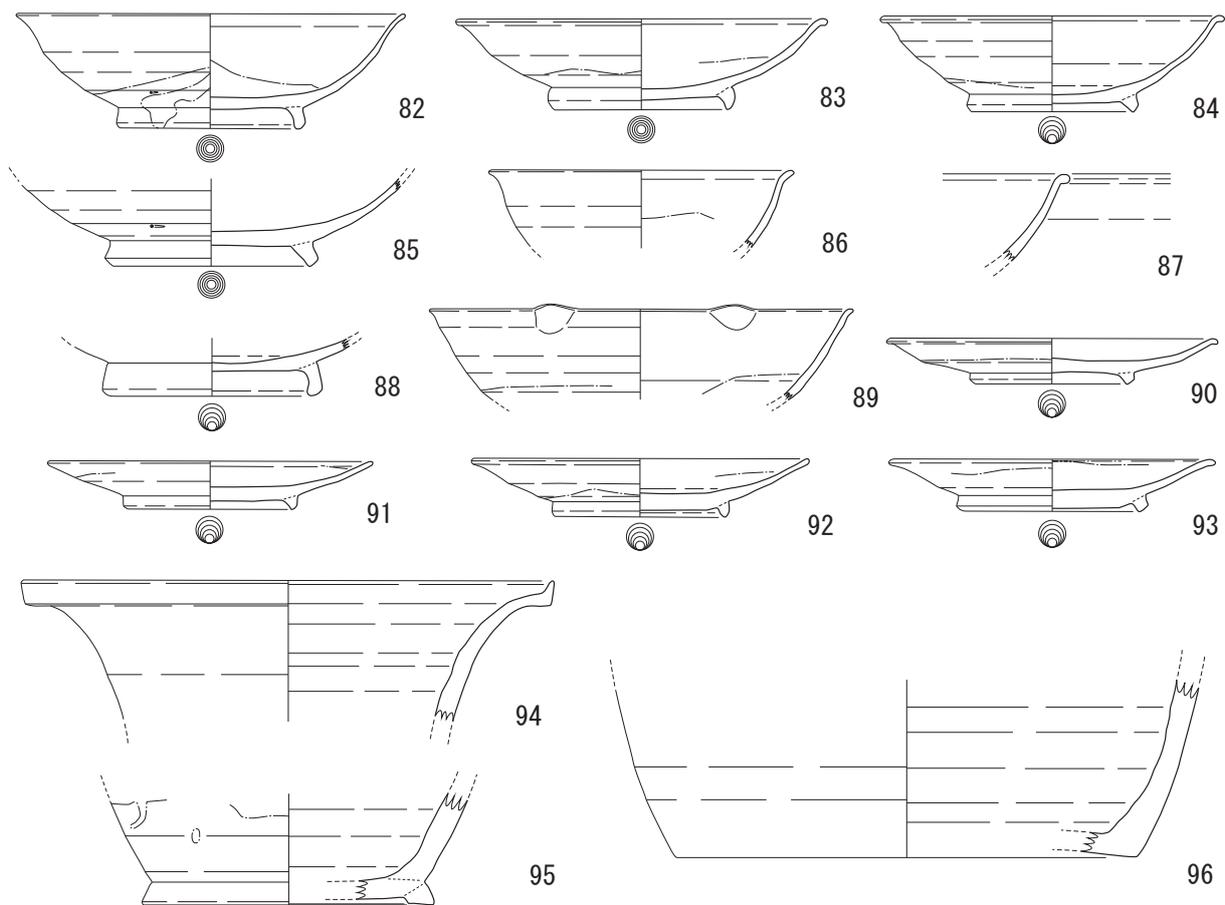
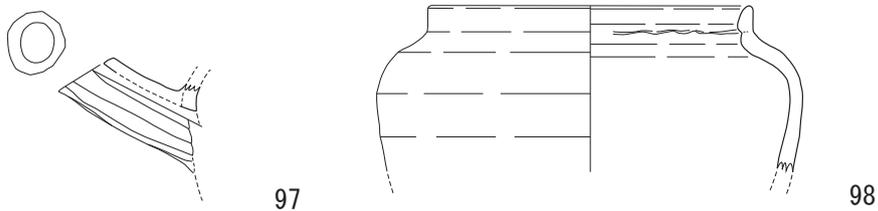


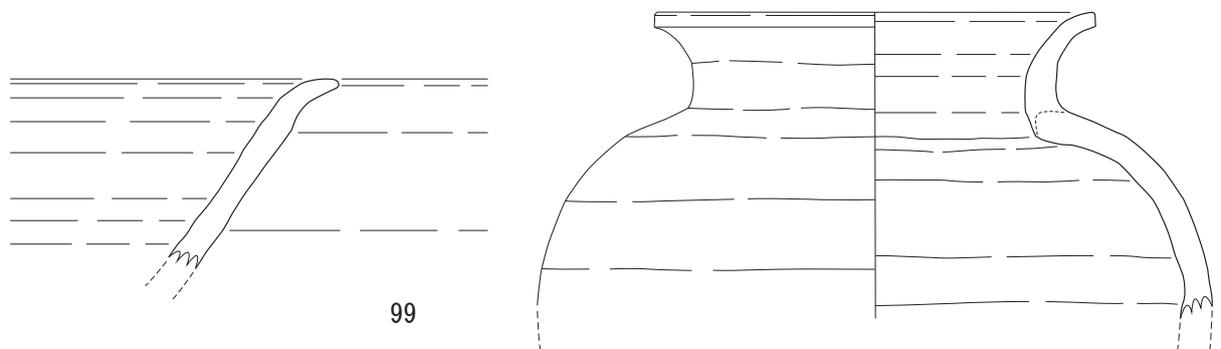
図 9 猿投窯東山地区出土資料①



東山 112 号窯跡 (H-112)



東山 G-72 号窯跡 (H-G-72)



東山 G-43 号窯跡 (H-G-43)

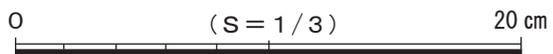


図 10 猿投窯東山地区出土資料②